
疑う円環

夏樹 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑う円環

【Nコード】

N0682W

【作者名】

夏樹 真

【あらすじ】

私立菖蒲ヶ淵高等学校。その教室に囚われた10人の生徒達。

教室の椅子に手足を拘束され、話す事以外を制限された彼らの前に現れたのは、

このクラスで自殺したはずの少女だった。

少女が告げる、復讐ゲームのルールとは？

拘束された生徒達は脱出できるのか？

プロローグ（前書き）

初投稿作品なので、ゆっくり進めていきます。

あまり過激にならないと思いますが、残酷な描写も含むと思います。
ミステリ作品を目指しています。

しょうがない読んでやろうと思ってくれた方は、よろしく願います。
（9月4日若干修正）

プロローグ

夜の学校。

それは、普通の生徒達の立ち入れない領域である。

何度もホラー映画の舞台になったように、日常と全く違う姿を見せる学校はそれだけで、不気味な存在感を発している。

あるいは全く知らない恐ろしい場所より、よく知っている場所のいつもと違う一面を見たとき、人は恐怖を感じるのかもしれない。

学校は閉鎖された領域だ。教育過程を終了した者にとっては、不可侵の領域であり侵入すれば間違いなく不審者となる。

機械警備の導入等により、一般家庭とは比べ物にならないほど堅牢に守られたこの領域は、守られている場所だと認識されている事で、逆に周囲の感心が薄い。

既に守られている場所で何か起きても、異常事態な筈がない。異常事態ならば、既に警備会社に連絡されている筈と考えるのだ。

人は自分と関わりのない場所に感心を持ったりしない。たとえ感心をもっても、きちんと守られているはずのそこに干渉しようとは、しない。

したがって、一度侵入を許してしまえば、そこは教師や生徒が登校してくる朝になるまで誰の干渉も受けない世界となる。

私立菖蒲ヶ淵高等学校。

県内では有数の進学校で、毎年有名国立大学に何人も送り込んでいる。

ただし、県外にまで知名度が届いているわけではないので、一般的な知名度はさして高くない。

せいぜい数年前に甲子園に出場した位だろうか、それも初戦敗退だったため地元で騒がれたのみだったが。

1学期のテストも終了し、後は夏休みを迎えるだけ。蝉の声はまだしないものの、木々の青々しさが示すように季節は確実に夏に向かっている。

生徒にすれば、夏休み前で待ち切れずじれったい期間。先生にすれば、ようやく1学期が片付いてさあ、夏休みの準備に入ろうという時期。

これが昼間であれば、生徒が何人居たとしてもおかしくはない。

しかし今は、夜だ。夜の教室に10人も人がいる……………。

いや、正確に言えば。教室の中に拘束されていた。

目覚めは最悪だった。

悪夢を見ていたわけでもなく、誰かにいきなり叩き起こされた訳でもない。

目覚めたのが僕のベッドだったなら、むしろ心地いい目覚めだったかもしれない。

しかし、現実にはこの先の僕（雨宮 ケイ）の人生で、今日以上に悪い目覚めは無いと思う。

「なんだよ。これ？」

目に映るのは、うすぼんやりとした暗闇の中、目の前に据えられた椅子と、そこに座る制服姿の人間。それに、自分の体に巻かれたテープだった。

いきなり過ぎて、状況が理解出来なかった。真つ暗な教室。何となく自分の教室である事が分かる。なぜ、僕はこんな暗い教室に居るのか？

でも、そんな事より大きな問題があった。

「いきなり、何で？っ手が！いや、手だけじゃない足もか！このっ！このお！」

僕は、手足と胴体を（つまりは全身を）固定された状態で目を覚ました。

とにかく、もがいてみる。普通の人はそうだと思うが、17年生きて来た人生の中で、手足を拘束された事など初めてだ。

どうやら、僕は椅子に縛り付けられているようだった。教室に普通にある椅子だ、鉄パイプと木の板を組み合わせたような、いたってシンプルな椅子。

腕は後ろに回され、交差した状態で固定されている。足は椅子の足に固定されている。さらには、胴体も椅子の背に固定されている。

固定に使われているのは、百均にも売っているような普通のガムテープだ。

全力で動かしてみるが、ギシギシと音が鳴るだけで、手足は全く動く気配がない。

知らなかった。ガムテープってこんなにも丈夫だったんだ。

これだけ強力なガムテープを作る技術者は凄いのと思うが、今だけは

恨みたい。

僕は、凄く身近なありふれた道具で、ありふれていない状態に拘束されていた。

ひとしきり、脱出のために出来そうなことをやって見た。といっても、手足を拘束された状態では、出来ることなど限られている。まず、手を引き抜け無いかやって見て、1分であきらめた。

それこそ、血が止まりそうな位きつく締め付けられているため、ちよつとやそつとでは、引き抜けそうになかった。

次に椅子ごと移動して何か、テープを切断する道具を探そうとしたが、そもそも椅子を動かす事が出来い。

全身固定された状態では、反動もつけられない以上しょうがなかった。

動く事ができなくなつて、逆に冷静になつてきた。動いて出来ることがない以上、それ以外を考えるしかない。

僕は、僕と同じ格好で拘束されているみんなを見た。

そう、教室には僕を含めて10人の人間が、椅子に固定され、向き合うように半径4メートルほどの円形に、配置されていた。

ちょうど均等に正10角形とでもいうべき形にならんでいた。

円は教室の中心に配置され、中央部に並べられていたであろう机は、壁際に整然と並べられていた。

そして、僕以外の9人はみんな僕のクラスメイトだった。

プロローグ（後書き）

文量はちよつとずつ増やせたらと思っています。

まだまだ、書き進めるのが遅くて。。。。

分かりにくい所があれば修正しますので、指摘して下さい。

第一話 状況把握（前書き）

比較的余裕があったので続けて投稿します。

第一話 状況把握

明かりの無い教室に拘束された僕たちは、

彫刻のように動かなかった。外に立っている街灯や、学校に隣接しているマンションの明かりで微かに教室が照らされている。

10人も人間が手足を拘束され、円形にならべられた姿は、まるで聖書や神話に出てくる罪人のようだが、僕らの格好が制服のままなので、

素人劇団のようにどこかアンバランスで、狂った雰囲気を持っていた。

僕以外は未だ目を覚ましていないようだ、僕も最初は大声をあげて、ほかのやつらを起こそうとしたが、睡眠薬でも盛られているのか全く目を覚まさない。

しばらく声を出していたが、結局諦めてしまった。

せめて、誰かを起こして相談したかったのだけど、手足が動かないつてのは、こんな事でも不便だ。

今すぐにでもここから逃げ出したいけど、なにもしできない。状況が煮詰まりすぎて、僕の頭は回らなくなり、考えているのかボーっとしているのか

分からなくなっていた。

時間は……。しばらく経って、ふと時計を見上げる。

もうすぐ8時半だろうか、目を覚ましてからまだ20分ほどしか経っていない。それでもひどく長く感じた。

クソ！いつもなら家でゆつくりドラマでも見ている時間なのに。

「うつ、うつん、うぁ」

隣の席から声が聞こえた。良かった生きてる。

自分の隣の席のやつでさえ、生きているか不安になるほど静かに眠っていたのだ。脈を取って確認したかったのだが、それも当然叶わなかった。

「う、は、あれ？ここは、って！？え！？なんだこれ？」

ようやく目を覚ました宮内ツトムがさっきの僕のように騒ぎだした。ツトムは、僕の中学からの友人で、キャラは分かりやすく言えばクラスのお調子者だ。

良く言うならムードメーカーか、こいつがいるだけで場が明るくなるとかそんなやつだ。ちなみに頭は悪かったりする。

僕だって頭の出来はそれほど良くないが、テスト前に僕に毎度頭を下げてチエーン店のハンバーガー一食分と引き換えにノートを借りていく。

「なんだよこれ？わけわかんねーよ！ガムテープかこれ！クッソ！取れる！取れるって！！」

「無理だよそれ、全然はずれないんだ。」

「！！。ケイか？おいちょっとコレはずしてくれよ！いたずらか？どうなってんだよ！！」

ツトムは、まるで僕が縛り付けたかのように睨みながら叫んだ。

「無理だって、僕だって両手両足縛られてんだから。さっきさんざん外そうとしてみたけど無理だった。ツトムのやつの方が緩いかもしれないし頑張っとしてしか言えない。」

ツトムはサッカー部で鍛えているし、身長も180以上でガタイも良い。明らかに僕より筋力がある分、無理やりにも脱出できる可能性は高いだろう。

僕はなるべく冷静に言ったのだが、よけいにイラつとしたようだ。

「なんだよそれー！ケイおめー薄情だなー！誰だこんないたずらしたやつー！ブン殴ってやるー！出て来いよ！」

ひたすらに喚き散らす、一向に反応は無い。

しばらくするとツトムも叫んでももがいてもどうしようも無いと悟ったのかだんだんと落ち着いてきたようだ。

「おい、ケイ。これどうなってるんだ？」

「僕に聞かれても全く分からないよ。目覚めたらこんな状態だったのは、ツトムと一緒に。ホント何なんだか。誰がやったか知らないけど、これだけ騒いでも反応無いし。全員が起きるまで待つてるのかも？」

「全員つて、ここにいるのうちのクラスの奴らだけか。この教室も良く見りやうちの教室だな。」

「僕らをこんなにした犯人は分からないけど、ただのいたずらじゃない気がする。こんなに騒いでもみんな全然起きないのは多分睡眠薬でも飲まされてるからだと思うし、とにかくしばらくは落ち着いてじっとしてるしか無いと思う。」

本当は、両手でお手上げのポーズでもしたいところだが、手が動かないので、表情だけで諦めのニュアンスをつくる。でも、良かった話す相手がいるとそれだけで少し安心する。

「しょうがねえな。ケイ。みんな起きたら起こしてくれ。」

「っておい！寝るのか？」

「しょうがねえだろ。手足動かねえんだし。頭使うのは苦手だし、全員起きるまで頭も使いようがねえだろうしな。」

そう言つとあつけにとられる僕の前で窮屈そうに眠りだした。

「このバカ本当に眠ってるし。」

こう言うのは、豪気というのだろうか、それともバカと言うのだろうか？

それから、10分程の間にみんなが次々に起き出した。

結局、ツトムも殆ど眠れなかったようだ。案外強がっていただけかもしれない。

起きた時のみんなの反応は多かれ少なかれ僕の時と変わらなかった。みんなぼーっとした様子で目を覚まし、まず手足が縛られている事に焦って暴れようとする。しばらくすると、周りに僕らがいる事に気づいて少し落ち着く。

そしてみんな、首をかしげるといった感じた。割と落ち着いて話していられるようになったのは、あれからしばらく経つけど、教室になんの変化も無いからだ。僕らは完全に放置されているよう

だった。

とりあえず、全員が目覚めたようなので、落ち着いて話し合おうという流れになった。（結局拘束から抜け出せた人はおらず、全員拘束され首から上だけ動かしての話し合いだ。）

落ち着くと言ってもみんな拘束されてどうしようも無い状態なので、宮原さんは泣きだしてしまっただし、気の弱いヨシヒコも今にも泣きそうな顔をしている。

「あー、落ち着けて宮原。泣きたいって気持ちも分かるけど、とりあえず俺らには話す事しかできねえんだから。脱出する方法とか話あおうぜ。」

とりあえず、といった感じでツトムが口火を切った。
ムードメーカーのこいつもさすがにこの状況でみんなを笑わせる事もできずまじめな調子だ。

「そうよ、さっちゃん。今は泣いてないで落ち着いて。考えれば何か抜け出す方法あるかもしれないわ。」

ツバサがその声をかける。因みに、さっちゃんとは宮原さんの事だ。宮原サトネ。それが彼女のフルネーム。

宮原はまあ今時数少ないほど大人しくて、おしとやかな娘だ。伏し目がちで男子全員に対して距離を置いている所があるし、女子でも連んでいる仲間は少ない。

色白で、いかにも”かよわい”ですよといった雰囲気だ。実際にどうなのかってのは良く分からないけど。

ツバサは、そんな宮原さんの数少ない仲間だ。もっとも、宮原さん

から話す姿は、あまり見たことがない。もっぱら、ツバサの方が氣を使いながら話題を振っているイメージだ。

三条ツバサ。さばさばした性格で、割と誰とでも仲良くしている。まじめな話も、バカな話も乗れるオールラウンダーでクラス委員もやっている。

クラスの中で成績も良く、先生の受けも良い。かなり隙のない超人だ。低身長で童顔で中学生に間違えられるというのが、コンプレックスらしいが、それはそれで可愛いという評価もある。

幼く見られないようにと、髪をかなり伸ばしているので、腰に届くかというほどの長さの黒髪だ。

「そうは言っても何を相談する？今の状態じゃ身動きとれないしできる事も限られているが。」

まだ泣きやまない宮原さんをよそに、大神君が話を進める。

大神タダシ。クラストップの成績で、5教科全て得意という化け物。ただ、変わった性格で、あまり多くの人というか、人とあまりつるまない。

いつも本か携帯を開いていて、ほとんど人としやべってない日もあるんじゃないかな？細身でインテリ眼鏡。ちよっと近寄りがたく、おたくっぽいという評価を受けている。

「何を相談ってそりゃ、脱出方法だろ！」

ツトムが突っ込む。が、大神君はボケるタイプでもないし、今のはボケじゃないだろう。

「いやいや、今はボケじゃねえってバカがおめーは。」

ボケじゃないのに突っ込んだツトムに南谷が突っ込みをいれる。

南谷ユウキ。ツトムと同じくサッカー部所属で、エースだ。クラスでは、僕と同じくツトムのボケに突っ込む役割をしている。

短髪で長身。金髪なので、見た目はいかついが、話しやすくいいやつだ。

「いや、わ、わかってて和ませようとしてだな。俺様のボケが逆にレベルが高すぎたか。」

「いって、いって、無理してごまかさない。」

こんな時なのにこの二人が喋っていると漫才でも見ている気がする。

「アンタ達それくらいにしなよ。脱出と言うけどさ、自力で脱出するのは難しいかもね。アタシは無駄に体力使いたくないし。ねえ、ツバサ。学校って警備員とか巡回して無いんだっけ？」

大神君の疑問を補足する形で山里さんが続けた。

山里ユウコ。クラスの女子の中心人物で、何かと目立つ。モデル体型で制服のスカートもかなり短くしているし、メイクやアクセサリーに關してもうるさい。

うちの高校が真面目なだけに、そこまで派手に髪を染める人はいない（せいぜい茶髪まで）その中で、かなり明るい金髪に染めている彼女は、かなり目立つ。

全ての学年に知られているが、逆に先生にも目をつけられている。悪目立ちとも言つか、ツトムとあわせてクラスの2バカで通って

いる。

付き合っているわけでもないけれど、お似合いな馬鹿夫婦だ。もつともそう言つと二人とも怒るのだけだ。

見た目軽そうだが、彼氏はいない。告白されても全部振っているらしい。本人曰く、私に釣り合う男はまだいないとのことだ。

「どうだろう？さすがに、学校のそういう部分についてまで私は詳しくないからなあ。シズちゃんは？何か知ってる？」

「私も、あんまり詳しくは。ツバサちゃんが知らない位だし。基本的に守衛の人が居るんだけど、校舎内の巡回はして無いと思う。」

近藤シズク。生徒会の書記を担当している。いたって普通な性格にいたって普通の容姿。で、いたって普通に可愛い。一応クラス公認の僕の彼女だ。ただ、シズクの方が恥ずかしがってクラスではあまり、一緒に行動しない。

どうして、彼女がこの場に居るのかと最初は驚き焦ったが、シズクだけが拘束されたんじゃない。僕と一緒に居られて良かったと考えるようにしている。なんとか一緒に脱出しないと。そう思い、シズクの方を見る。

シズクも僕の方を向いてうなずいたように見えた。さらに相談を進める。

「そうすると、誰かに見つけてもらつても望み薄かな。みんなが、起きる前に僕は結構声出したけど見に来る人は居なかったし。」

「うーん。まあそりゃそうよね。学校って広いからここで大声出しても、近くの家でも聞こえないだろうし。そうすると、手詰まりか

な。」

ツバサの発言を最後に、みんな黙ってしまった。思い思いに考えているようだ。

体を動かせないって事は出来る事のほとんどを奪われているって事だ。

声以外の手段を持たない僕らに出来る事は少ない。

「ねえ、私達がこういう状態になっているって、きつとみんな気づいてるよね。」

沈黙を破ったのは、佐々木ヨシノだ。陸上部で特に活発なタイプで、健康的な日焼けが目立つ。

今は制服だが、運動着が抜群に似合う。授業もジャージで受けていたりする。

運動するときに、髪を纏めるのがチャームポイントだ。ちなみに幼馴染なんだが、

小さい頃は僕の方がいじめられてた気がする。家は近所だが、いまではそれほど深いつながりが無くなっている。

「うん？みんなって家の人とかって意味か？」

「そうだよ。こんな時間まで家に帰らなかったらきつと、さわぎになるよね。そしたらココにも探しに来てくれるかも！」

「アタシのそこは無理だなあ。この時間まで帰らないとか良くあるし、8時台とか余裕で遊んでるしょ？でも、他の人は違うかな。宮原とかどう？アンタ大事にされてそうだけど。」

まだ、涙が消えていないがさっきよりも落ち着いた調子で、宮原さんが答える。

「……うう……ぐすつ。私の家でもこの時間……じゃ……まだ、さわぎになって無いと思う。でも……」

「このまま、10時過ぎまで家に帰らなければ……さわぎになると思う。……うちの親の事だし警察にも連絡するかも。」

「とりあえずは、このまま待つしかないって所か。宮原の所に限らず、誰かの親が警察に連絡するかも知れないし、10人も帰って無いとなりや。まず学校に確認に確認に来るだろうしな。」

南谷がまとめる形になった。とりあえず、何にも出来ないけれど方針は決まった。

それだけで、少し安心できるものだ。ホッとした空気が流れる。

「あの、ちよつといいかな。」

今まで、黙っていた。ヨシヒコが発言した。

鈴木ヨシヒコ。気が弱くてクラスでも目立たない存在。宮原さんの次に泣きそうだったが、さすがに女子の手前泣くまではいかなかった。

そして、みんなが目をそむけようと、避けていた事を口にした。

「時間になる前に犯人が来たらどうしよう?」

第一話 状況把握（後書き）

登場人物の紹介完了。

だいぶ駆け足ですが・・・。

技量不足で口調でキャラを区別するのが難しいのと、

シチュエーション上同じ空間に10人が居る状況を避けられないのが、

課題。。うまくできるよう頑張ります。

第二話 犯人考察（前書き）

ちよつと私用で資格の試験がありまして、しばらく書いてませんでした。

とりあえず、メインになる所までは急いで持っていきたいと思っています。

次回くらいには、話の趣旨が見えると思います。

第二話 犯人考察

「時間になる前に犯人が来たらどうしよう?」

その言葉を聞いた私達は、みんな停止してしまいました。

私の名前は三条ツバサ、この学校・・・私立菖蒲ヶ淵高等学校の2年A組の生徒です。

一応クラスの委員長をやっていて、みんなからはツバサと呼ばれています。

そして、いまトンデモナイ状態に陥っている最中です。

私と私のクラスメイト9名が、夜の学校の私たちの教室で拘束されているのです。

正直わけが分かりませんね。

例えば、これが女子だけ拘束されていて場所が町はずれの倉庫なんかであれば、

大いにパニックになるでしょうけれど、それでも筋は通ります。

世の中に変態の男の人は沢山いるのです。この町に居てもおかしくありません。

だからこそ、この状況は不自然です。私たちを拘束し、しかし何もしない事に何の意味があるのでしょうか?

考えが脇道に逸れてしまいましたね。鈴木君の発言に戻しましょう。

鈴木君の発言はもつともな事です。

私も、その可能性について考えたし、頭の良い大神君なんかも当然その事は考えていると思います。

それでも、あえて言わなかったのは、さっちゃんがパニックになるかも知れないという配慮があつての事です。

もつと場が落ち着いてから議題にしようと思つていたのですが・・・。

ついジトつとした目で鈴木君を見てしまいます。

まあ、彼も大分追いつめられているみたいだし、こういう発言は仕方ないかもしれません。

今もみんなが黙ってしまった空気に耐えられずに、目線を下に向けていますし。

「は、犯人がまだ近くに居るって事なの？」

震えながら、佐々木さんが言います。

その問いには、鈴木君では無く。大神君が返しました。

「近くに居る可能性はあるな。」

だけれが、ヒツツという掠れた悲鳴を上げます。

「この状態、俺たちが拘束された状態で放置されているのが腑に落ちない。

普通に考えたら、拘束だけが目的とは考えられない。

この後何かをするつもりで、犯人がその準備をしているという事は十分考えられる。」

確かに、私と同じようにみんなも違和感を感じていたのか何人かの

人が頷いています。

「おい！なんでお前はそんなに冷静なんだよ！犯人が近くにいるかもしれないねーんだぞ。」

横から南谷君が噛みつきます。強気な口調とは裏腹に大分焦っているみたいですね。

「まだ、可能性の話だ。この状態で放置されているのがそもそも、おかしいと言えはおかしい。俺たちが自力では抜け出せない事に自信があつたのかもしれないが、普通は見張り位は残すだろう。」

そう考えると、犯人は少しだけ外すつもりでどこかに行つて、トラブルで……。

まあ、これは警備員に発見されたとかで、帰れなくなっているかもしれないし。

単純に俺たちを朝まで縛るだけのイタズラの可能性もまだ消えたわけじゃない。」

「そういう事を言い出したら、何でもありだな。」

ここから脱出するためには、どう考えてもドアの前を通る必要があるんだし、

例えば廊下で見張りをしている可能性もあるんじゃないか？。」

「雨宮の言う通りだ。どれにしても憶測にすぎない。」

ただ、廊下で見張っていたのなら、俺たちの起きる時の騒ぎに気付かないはずがない。

いくら縛っているとは言え、ガムテープだし万が一もあるだろう。

不安になって見にくる訳でもないってのは、遠くにいる証拠だと思ふ。憶測だが。」

さつきから顔面蒼白のさっちゃんに気を使っただ、大神君はそう言
って締めくくりました。

意外と気づかいのできる人なのかもしれませんね。

これだけ、非現実的な状況にありながら坦々としていられるのも或
種の才能なのかもしれません。

「大神、アンタちよつと冷静すぎるよ。こういう状況だと頼もしい
けど、逆に怖いくらい。」

「そう言われても、これでも焦っているよ。ただ焦っても出来る事
が無いから

極力落ち着こうと思っているだけだ。それに、もし犯人と格闘なん
て事になったら俺は役に立たないさ。

そうになったら、宮内君と南谷君に活躍して貰わなきゃならないだろ
うし、適材適所だ。」

この状況だったら誰も格闘なんて出来ないだろ、という突っ込みは
入りませんでした。

冷静になろうとしてか、普段以上に表情を無くした、大神君の顔は。
暗闇と相まって、こう言っただは失礼だが・・・実験動物を見つめる
マッドサイエンティストのような

とても不気味な表情に見えました。

その雰囲気巻き込まれないようにと、私は口を開きます。

「ともかく、現状脱出の方法がないという事に変わりはないわね。
犯人が戻って来る可能性についての議論はどうやら結論は出せそう
にないみたいだし。

ともかく、落ち着いて待ちましょう。今はそれしかないわ。」

それで。一通りの議論は終わったようです。

普段から、委員としてまとめる立場であった事がプラスに作用したのか、みんな私の発言に従ってくれるようです。とりあえず落ち着いてよかった。

近くの通りを車が通過していく音がします。

普段だったら気にも留めない雑音がいやになります。

まるで、この教室内と外の世界が別物であるかのように遠く感じるから、耳につくのでしょうか？

この教室の外の世界は、きっと昨日と変わらずに、普段通りに動いているのでしょうか。

願わくば、このまま犯人が帰って来ずに、誰かが助けに来てくれると嬉しいのですが。

そんな私の願いは、残念ながら叶う事は、ありませんでした。

あれから、散発的にみんな会話をしようとはするものの、いつ犯人が帰ってくるかも知れないという

状況では、気楽な会話を続ける事もできずに結局は黙ってしまふという事を繰り返していました。

そして、誰かがもう、9時になったねと言った時でした。

廊下に足音が響きました。

私達はみんなその瞬間に黙ったので、足音はかなりはっきりと聞き取る事ができました。

それほど響く事のなく聞こえるその音は、しかし確実に私達の居る教室に向かって来ます。

「みんな！まだ寝てるフリをしよう。もしかしたら、起きてるのバ

レナイ方が良いかもしれない。」

突然、雨宮君がそう言って、目を閉じました。

みんなも慌ててそれに続きます。私も目を閉じました。

確かに、足音の主が犯人だった場合、まだ寝ていると思わせた方が得策かもしれません。

この状況を作った理由とか、について何か漏らすかもしれませんし。

廊下の足音は、この教室の前で止まると躊躇無く、この部屋の扉を開きました。

私はまだ目を閉じたままです。

足音はそのまま、黒板の前の教卓に進んでいきます。

この時点で助けの可能性は無くなりましたね。

普通に助けに来た人ならこの時点で無言のはあり得ませんから。

「みなさんが起きているのは分かっていますよ。先ほどの声も聞いていましたから。さあ、寝たふりをやめて起きて下さい。」

声の主は予想に反して若い女性です。

拘束なんて真似をするからてつきり男性だと思っていたのですが、外れたようです。

まあ、犯人の一味で見張り役という可能性もありますが。

声の主が女性という事に少し安心し、目を開くとそこに居たのは、全身黒い布を纏って姿を隠した謎の人物でした。

正直、あつけにとられてしまいました。雰囲気としては、物語に出てくる中世の黒魔術師とでも言えますか、全身にすっぽり被ったローブのような物で全く顔が分かりません。

体格はどうやら女性の声に違わず身長が低いようですが、全体的に

痩せているのか太っているのかさえ分かりません。

「おい、お前いったいなんなんだ!!」

全員が驚きで言葉を失っていた状態で、一番先に意識を取り戻し、謎の人物に問いかけたのは南谷君です。

その声を聞いて、謎の人物は確かに笑ったような気がしました。

「こんな格好でゴメンね。でも、みんなもう忘れちゃったのかな、ひどいな。同じクラスなのに。」

「ふざけるな!!俺はこんな事をするクラスメイトなんて知らねぞ!!」

「ひどいな南谷君は。私だって。みんな気づかない?」

みんな何も反応しません。

確かにその声は同年代の声の気がします。でもクラスメイトの顔を思い浮かべますが、この声は知らないと思います。

その少しの間に、その人物は教壇から降りて、私達の座っている円の真ん中にやってきます。

少し手を伸ばせば届いてしまいそうな場所でその少女は宣言しました。

「誰も、覚えていないなんてショックだわ。私の名前は如月 ヤヨイよ。」

私の肩がビクツと震えました。忘れたくても忘れられないその名前は、先月このクラスから姿を消して、

そして、そして理由不明の自殺をした少女の名前だった。

第二話 犯人考察（後書き）

後から見直して変だった所は随時加筆・修正します。

章や、話数もいじるかもしれません。

というか、たぶんいじります。

どうも、後から見ると直したいところが多くて困ります。

ちゃんと、推敲しろよって思いますよね。

・・・・・・・・がんばります！

第三話 犯人の告げる言葉（前書き）

少し時間が空きましたが、これでようやく導入の完了です。
微妙に修正。

第三話 犯人の告げる言葉

「誰も、覚えていないなんてショックだわ。私の名前は如月 ヤヨイよ。」

真つ黒な格好のその人物が告げた言葉に俺たちは声を無くしてしまった。

なにかから説明すりゃいいかな？

こういう場合は、自己紹介とかか？

いやまあ、俺自身の心の中の独り言なんだから順番なんて俺が勝手に決めりゃいいのか。

それでも順番は大事か？

ただでさえみんなからバカと呼ばれる事が多いんだから、こっちだって自分が

馬鹿だつて事位分かつてる。

それでも、愛される馬鹿だつて胸を張って言えるけどね。

まあそれだけ馬鹿でもあんまりいつもいつも馬鹿にされたいわけじゃないんで、

なるべく、事の順番とかやり方は守ろうってわけだ。

それで自己紹介するなら俺は、こここの高校のクラスメイト宮内ツトムだ。

俺の性格とかは、既になんとなく伝わってる気がするから省く！

イヤ、面倒な事は嫌いなんだ。

とにかく俺は気がついたら、夜に自分の教室で縛られてて、周りには俺の他に縛られてる奴らが、9人も居て。

脱出できない代わりに犯人らしき人もいないから、
なんとか、みんなで脱出の方法とか考えて、といつても俺はあんまり
考えが浮かばなかったから議論は任せてただけだな。
そしたら、いきなり9時になった時に犯人が現れて。

で、その犯人があのだ”如月 ヤヨイ”ってのはどういう事だ。
如月ヤヨイっていうのは、ほんのひと月前までこのクラスに居た女
の名前だ。

そう、居たっていう言い方で分かんと思うが今はもう居ない。

自殺したんだ。

テレビや何かで自殺の報道を見ると違い、まさかうちの学校の俺
の居るクラスで自殺が起きるなんて完全に想定外だった。

校門に報道のカメラが群がっていたり、事件当日はへりなんかも出
てきて大騒ぎになって、

俺もさすがにその時は、クラスに笑いを提供する訳にもいかず。お
となしくしていたもんだ。

そんなのがまだ一ヶ月前だ。

どっちにしたって決まってる。”如月 ヤヨイ”が死んでる以上目
の前のこいつは如月ヤヨイじゃない。

「ふざけるな！このクラスの如月ヤヨイは死んだんだよ！それも自
殺だ！！だからここに居る訳がない。」

「ひどいなあ。宮内くんも。私はここに居るんだけど、まあ、こっ

そり生き返ったでもいいし、実は幽霊ですっていうのも面白くていいね。」

黒いヤツ（今の段階ではこいつを如月ヤヨイとは呼びたくない）は、自分の事のはずなのに興味の無い口ぶりで答える。

そして、一人でククツと笑った。俺は、その笑いに凍りつく。冗談じゃ無い。こんな状況で面白いなんて事あるか！！

「ね、ねえ。本当にヤヨイちゃんなの？ねえ、私、サトネ分かる？。」

「もちろんよ。さっちゃん、親友なのに忘れるはずないでしょ。」

「や・・・ヤヨイちゃん・・・ぐす・・・生きてたの・・・良かった。」

そつえば、宮原は如月と仲が良かったな。だから、黒いヤツの言葉をもま信じてしまっているのかもしれない。

「宮原、まだこいつが本当に如月かは分らんぞ。」

大神から、鋭い警告が飛ぶ。それは、間違いなく宮原の耳に届いたはずだが聞こえていない。

「ねえ、ヤヨイちゃん。・・・私・・・どれだけ泣いたと思う。・・・寂しかった・・・悲しかったよ・・・。」

でも、こうして会えて嬉しい。」

「ふふ、ありがとうさっちゃん。でも、ごめんなさい。私ねあなたたちを・・・ゆる・せ・な・い」

いきなり空気が変わった。それは、一瞬だけだったが狂気に狂った声色だった。

しかし、その声も次の瞬間には普通の声に戻っている。

酷く恐ろしい感覚、俺はこの黒いヤツが前にもまして、得体の知れなく感じられた。

「ちょっと、長い話になるよ。それもつまらない話ね。それでも聞いてもらうけど。」

私は、如月ヤヨイ。まあ、疑いたい人はどうぞ。私が誰であっても、私があなたたちにやつてもらう事にかわりはない。

そして、拒否権も無いわ。まあ、あなたたちのこの状況で拒否権とか言い出せたらある意味すごい強者だけど。

話は、そうだな。やっぱり、みんなの為に私が自殺した所から話そうか。

私の自殺について、みんな詳しいことは知らないよね。自殺した状況から、動機から、時間から、何も知らされていないはずなんだ。

うちの家庭で、親が教師っていうのもあって、身内で、しかも学生で自殺者が出るなんて恥なんだよね。

だから、世間に対してもいろいろと状況を隠しているというわけ。」

黒いヤツの話はよどみなく進む。自殺の話をしているというのに、どこか楽しそうだ。狂ってやがる！

「で、私の自殺の動機なんだけど。はっきり言って、この中の人にいじめられてたのが原因なんだ。気付いてなかったでしょ。」

私が生き返って来た理由なんだけど、正直未練とかあってさ。その人に復讐ってのもあるんだけど、それだけじゃなくてね。」

自分のクラスメイトの中にいじめの犯人が居て、そいつに復讐した

いなんて事をあまりにあつさり、

今日の日経平均みたいになつまらないニュースのように淡々と言われ
て俺は反応できなかった。

は？なに？

うちのクラスでいじめで、それが原因で如月が自殺して、それで・
・。自殺したはずの如月が生きていて復讐しようとしている。

なんなんだそれー！！

なさけなくもあるがそんなもんは、本人同士でやってくれ、俺みた
いな清く正しい一般人を巻き込むなよ・・・・。

「自殺させた奴もだけど、クラスメイトで有りながらいじめに気づ
いてくれなかった貴方たちも憎い。

それほど、巧妙に行われてたわけじゃ無いから気づこうとすれば気
づいたはず。

なのにみんなのんきに学生生活を送って来た。ふふっ、自分は何も
していないのになんでこんな目に合うんだとか思っているでしょ。

何もしなかったからよ！

私に声をかけてくれるだけでも良かった！

ほんの少しいたわってくれただけで良かったのにだれもそんな事す
らしてくれなかった！

生きているならいいじゃないか？ふざけないで！私は一度死んだの
よその重さを考えなさい！」

黒いやツ・いや、ここまできたら偽物だとしても如月と呼ぶか。

如月はそこで興奮しすぎたのを抑えるためか、

一度深く息を吸った。

「という訳で、貴方たちには罰を与えます。といっても、ただ単純
に殺すなんて事はしません。

今からでも考えて、誰が私をいじめていたのか気づいたら助けてあげる事にします。」

「大事な事なんで良く聞いてください。

今から、1時間時間後・・・10時になった時点で貴方達10人の中から、いじめの犯人であつたと思う人を提示してもらいます。

自分で名乗り出ても、多数決でも何でも構いません。ただし無回答は許されません。

もし、犯人であつてもなくても、私はその人に罰を与えます。次の1時間後にさらに一人を指定してもらいます。

これを1時間ごとに繰り返し行ってそして、貴方たちの中にいじめの犯人が居なくなつた時点で、

貴方達を開放します。どうです？公平でしょ？いじめの犯人を先に指摘してしまえば、他の人は罰を受けずに済むのだから。

今までの・・・私が自殺するまでの事を良く思い出すと良いでしょう。」

それだけ告げると、教卓から離れ扉に向かって行く。誰も何も話せない。

扉を開く前に一度だけ振り返るとさらにこう告げた。

「頑張ってください。私も友達は罰したくありませんから。そうそう1つだけヒントを。イジメの犯人は2人いますよ。ふふふ・・・。」

その言葉を残し、如月は去った。

一人目の確定まで残り・・・・・・・・・・50分・・・・・・・・・・。

第三話 犯人の告げる言葉（後書き）

わかる方には、分かると思いますが、この小説内で犯人が提示したルールは、人狼というゲームを参考にしています。

人狼bbsというゲームのできる掲示板もありますので興味のある方は、

試してみると面白いと思います。

第四話 めぐる議論

その真つ黒い女が去った後、教室は沈黙に包まれた。

沈黙を破ったらあの、訳の分からないゲームを認める気がして、それで誰もしゃべれないのかもしれない。

あの女の事を、如月のヤツだなんてアタシこと山里 ユウコは認めはしないけど、

死んだ人の名前を騙られるってのは本当に、気分の悪いものだった。冗談だとしても、ついていい冗談じゃない。

冗談を言った方だって、言われた方だって嫌な気持ちになる。

あの女にとっては何かしらの意味を持っているのかもしれないけれど。

ああ、本当に気分が悪い。

本当なら今日だって、今この時間だって外で遊んでるはずだったんだ。

ここに連れられてきた経緯をはっきりと思い出せないのだけど、

今日はここに居ない友達とずっとファミレスでおしゃべりするつもりだった。

最近のドラマの話とか、最近告白された時の話とか、

話に飽きたら、ファンシーショップを廻るか、ファミレスでバイトしてる友達をひやかしに行こうか、それともカラオケかな？

そんな、普通の事でぐだぐだと悩むつもりだったのに、なんなのこの仕打ちは！！

如月やヨイについては、正直アタシの印象は良くない。

そこにいる、宮原サトネと一緒にいつも暗い感じで居たのを覚えて
いるだけだ。

ファッションにも流行にもほどほどに付き合うけど、根っこは真面
目のいい子ちゃん。

中学の頃までは、アタシだって成績優秀で親からも先生からも期待
されていたもんだから、

如月ヤヨイと変わらなかったけど。高校に来てから、頭の差ってや
つに気がついた。

どんだけやったって、敵わないヤツはいる。それが、宮原サトネで、
如月ヤヨイだ。

まあ、アタシがその差に気づく頃にはもう学業優秀ない子になる
のは諦めてたし、なにより高校生活を楽しむので忙しかった。

派手目な遊びに惹かれていったアタシと如月ヤヨイの気が合うわけ
無いから、極力クラスでも寄らないようにしていた。

無駄な衝突は避けるべきだよ。それこそ時間の無駄だから。

せっかくの青春の時間をそんなつまらない事で浪費するなんてバカ
だよな。

そういう訳で、アタシは如月ヤヨイについては良く分からないんだ
けど、

さっきのルールは気になる。

”如月ヤヨイが誰かにいじめられていた”

ここまでは、まだいい。クラスが一致団結していて、いじめなんて
一切ないなんて事は所詮先生の頭の中だけだ。

ひとクラスに40人も人が集まっているんだし、何か衝突があつて
もおかしく無いじゃない。

アタシはよく知らないけど、あの子は確か吹奏楽部に入っていたは

ず。

クラスに他にも吹奏楽部の女子は居たはずだから、クラブ活動のなかで何か衝突が合ったって事も考えられるし、とにかく可能性だけは排除できない。

” 1時間ごとに私達の中から犯人を選ぶ ”

これが良く分からない。

そもそも、何がしたいんだか。アタシは、あの黒い女が如月だとは思ってないから、

如月が死んだ今になって、犯人探しをする事になんの意味があるんだろ？

しかも、あの女は犯人を知ってるんだ。それなら、アタシ達に犯人探しをさせる意味なんてまどろっこしい事しないで、

犯人だけを罰すればいい。

アタシが考え込んでいる間にも誰も一人も言葉を発しなかった。

窓からわずかばかりに、月明かりが差し込んで、アタシ達の影を床に伸ばしている。

影の形だけを見れば、縛られてなんかいないから、ただ丸くなって座っている図。

まあ、でもこんな風に丸くなって座っていると悪巧みでもしている絵みたいだ。

世界を裏で操る参謀達の秘密の集会とか・・・。

くだらない。

くだらない事を考えてないで、そろそろ先に進むべきだ。

みんなも考えているのだろうけど、結局相談しないことには始まらない。

ふと、時計を見上げる。

前髪が気になったけど、どける事ができないから、しょうがなく頭を振る。

隣のツバサがビクッと反応した気がした。

9時20分。

あの女が言ってた時間までは40分。だけど、40分なんてあつという間だろう。

何をしゃべればいいのかも分からないけど、議論が始まれば収束しない気がする。

それでも、アタシは声を出した。

「黙っていても仕方ないしさ。ともかく出来る事を相談しようよ。」

「相談………。しないとダメだね。」

ツバサが相槌を打ってくれた。

でも、他の人の反応が薄い。

「相談って何の相談よ！アイツに！あの如月さんを名乗った得体のしれないヤツに！誰を差し出すかって相談でしょ！！」

突然弾けるように、近藤さんが叫んだ。

目に涙まで浮かべて、アタシを睨みつける。

普段大人しいから、逆に迫力がある。この子こんな風な性格だったんだ。

アタシが追加で説得する前に別の声が遮った。

「シズク！落ち着けて。お前が反発したいのは分かるけど、ユウコだって、

そういう反発があるのを分かってあえて言い出してくれたんだ。10時の時点で、誰を犯人として指名するかって問題はあるけど、

それ以外にだつて話さないといけない。

みんなでなにも話さないまま、10時になっちゃうのが一番いけない。

とりあえず、落ち着いて。みんなで話し合おう。」

「・・・でも、ケイちゃん・・・私。」

「大丈夫。大丈夫だよ。最悪の場合でも、お前を一人目にはしないから。」

「ケイちゃん・・・嫌。イヤ・・・最悪なんて。」

雨宮の言葉で、近藤さんはさらに顔を歪めてしまった。

「おい、彼氏！近藤さんの心配煽つてどうする。

近藤さん。その最悪にならないために、これから相談するんだ。こんな風に縛り付けて監禁して、

おまけに1時間ごとに1人罰を与えるなんてゲームじみた事を考えるサイコ野郎だけど。

説得するっていう方法もあるかもしれない。

罰つて言つても、まだその中身は分からないんだから、怯えすぎるのも良くないしね。

ケイのセリフと被つちまうけど、大丈夫だ。」

深刻になってしまいそんな雰囲気、ユウキが修正した。

スポーツ馬鹿に見えてこういう気がきくんだよね。南谷つて。

「サンキュー！ユウキ。シズク、落ち着いて、な？最初は、俺たち

の話を聞くだけでいいから。な？」

「ケイちゃん。私……。私……。」

それっきり、近藤さんは黙ってしまった。

残念だけど、気を使う余裕は無いから先に進めさせてもらおう。

「コホンッ！それじゃあ、もう一度言うけど。出来る事を相談しよう。といつても、話を絞らないといけないけど。大神。何か意見ある？」

アタシは、大神に振る。こういう時は、頭のいいやつにお願いする。こういう状況をアタシじゃ上手くまとめられない。

「……。そうだな。疑問点はいくつかある。

- 1 アイツは本物の如月なのか？
- 2 ゲームじみた方法を取るのはなぜか？
- 3 1時間ごとに与えられる罰とは何か？
- 4 アイツの語った事は事実か？特に、俺たちの中にイジメの主犯がいるというのは本当か？

5 以上を考えつつ10時になった時にどう対応するか？
といった感じか。

正直言つて、分からない部分だらけでこのまま、考えてもラチがあかなそうだな。

アイツの正体や、罰の内容については、今は考えてもというか。考える事すら無理なくらい情報が無い。

とりあえず、10時になった時の対応から考えるか。誰か意見はある？」

「さっき、説得案を出した以上。説得する案について話合いたいんだけど。みんなどう思う？」

俺は、やってみるだけの価値はあると思う。話を通じるかは、分からないけど。」

「説得ねえ。アタシにはあんまり話を通じそうには思えなかったけどなあ。それでも、

やってみるだけなら良いんじゃない。この状況で、なら相手と話して何か引き出すしかないし。」

「説得その物は、俺も賛成する。相手の体格から見て直ぐに暴力に訴えるタイプでも無いし、会話は成立するだろうな。ただ、どう説得するかは、また別に考える必要があるだろうな。」

南谷、アタシ、大神が続けて、説得を支持したので、場は説得する方向に傾いたようだ。

みんな口々に、私も、僕もと賛成を告げた。

最後に大神が決を取り、全員一致の形で説得を試みる事に決まった。

この議論の時点でまた、10分経過した。

今の時刻は、9時30分だ。

あと30分だ、あと30分で、説得の内容と、犯人を誰にするかを決めないといけない。

「大神、さっきどう説得するかって言ってたけどそれは、どういう

意味？」

「ああ、あれは犯人が如月を自殺に追い込んだ犯人を・・・こう言う」と混同するな。あいつの言い方をそのまま

使わせてもらおうと。如月は如月本人の自殺の原因になった犯人を恨んでいる。

だから、こんな犯罪行為をしたのだろう。だが、先ほどのルールを考えるとそれを見逃した友達も

恨んでいる。しかし、友達の方には犯人を当てれば生き残れるように配慮している。

ここから考えて、如月を説得するには、犯罪行為であるこの教室に監禁されている俺達全員の開放は認められなくても、

犯人意外を開放してくれるようには、説得できるかと思ったんだが・・・。

いや、もちろん全員開放を求めて説得すべきだ。ただ、状況によっては犯人意外の開放としなければならぬかもしれない。」

大神は取り繕ったが、

その議論は・・・先ほど近藤さんの指摘していた、誰かを犠牲にする。議論だ。

もちろん、建設的で反論できないほど、まともなより多く生き残るための方法論としては正しい方法だ。

「別に、大丈夫でしょ？ここに犯人なんて居ないでしょ？」

言葉とは裏腹に、不安そうな顔で佐々木さんが全員を見渡す。

微妙な沈黙が続いた。本当はみんな、アタシ達の中に犯人がいると
う・た・が・っ・て・いる。

ただそれを口にはできない。

アタシ達はともに捉えられた仲間だし、この場でみんなを敵に回す発言をしたら最悪1人目の犯人が自分になってしまいかもしれない。

「佐々木さん。犯人の居る居ないは、関係無いんだよ。如月が俺達の中の誰かを犯人だと思っっているって事が大事なんだ。」

それを否定できない以上、真実は分からないけど犯人として開放されない人が出てしまうかもしれない。そう言っているんだ。

それとね、俺は如月への説得は、宮原一人にお願いしたいと思っている。」

大神はまた、一歩進んだ議論に飛び込んだ。

一人目の確定まで残り・・・・・・・・・・25分・・・・・・・・
・・・・・・・・・・。

第五話 サトネの心（前書き）

一人一人の心の描写でつなぐ形式は、
しばらく続けていくつもりです。

第五話 サトネの心

私の親友のヤヨイちゃんが死んだと聞いたのは、
一ヶ月と3日前です。

私は、気が弱いところがあってもう4ヶ月も同じクラスで過ごして
いるみんなとも

あまり上手く打ち解けられていません。

そんな、私にとって生涯で一番大切な友達・・・それが、如月ヤヨ
イちゃんでした。

「さっちゃんは、もっと自信持った方がいいって!」

「でも、やっぱり私、人と話すの苦手で。男の子とか怖くて、話し
かけられるだけで固まっちゃうし。」

「だったら、女の子ならいいよね?」

「女の子でも、初めての人はやっぱり苦手だから。」

「だあー!もう。ちょっとさっちゃん!いーい?誰だって初めは初
対面!そんな事言ったら一生友達
できないじゃない?」

「私は、・・・・・・・・・・ヤヨイちゃんが居るからいい。」

「あーもー、この子は可愛いんだから。でもダメ!ツバサさん!
一緒にお昼食べようよ!」

「いいわよ。宮原さんも一緒に食べよう！」

そんな風に教室の中でも、私がみんなの輪に入れるように気を使ってくれたし。

小学校の時から友達で、一番私をよく知っていて、私もヤヨイちゃんを一番よく知っている。

そんな関係でした。

この高校に来ることにしたのも、自宅から近くで程よい学力の高校というのも

あったかもしれないけど、結局は一緒の高校に行きたかったからかもしれない。

いや、多分。絶対そうです。

私たちの間に秘密なんてなくて、お互いがお互いに一番に信頼しあえる親友でした。

私の前だと、いつでも引張っていつてくれるキャラなのに、クラスの中だと大人しくて、”宮原さんと如月さんって似てるよね”といわれる度に、嬉しかったから”そうでしょ”と言っていたけれど、

違うよ如月さんの方が素敵なんだよと心の中で思いました。口にはしなかったけど。

中学の時に、ヤヨイちゃんに初めて彼氏が出来た時も。

嬉しそうに私に報告してくれたのを覚えています。

同じ部活の先輩で、それまで私と一緒に登下校していたのが、その日から先輩と一緒に登下校するようになって。

「ゴメンね！サトネ！一緒に通えなくなっちゃった！」

「え？どうしたの、そんないきなり……。」

「ふ、ふん。カレシ！」

「え？か、か・れ・し？」

「そう！彼氏よ！昨日部活の先輩にいきなり告白されちゃって！それが私が前からいいなって思ってた先輩なの。」

「も焦っちゃってさ。」いきなり、”話があるから片付けの振りして最後まで残って”なんて言われちゃってさ。

「ホントにドキドキよコレ。何言われるんだろうなー。まさか、告白？なんて妄想してたら本当に告白って！？」

「もう、焦りすぎて心臓壊れるかと思ったよー。」

「そ、そう。良かったじゃない。念願の彼氏が出来て」

「本当にそうね。それでね。明日から彼氏と、この響きいいわね。彼氏と登校することになったかったから。」

「しばらく一緒に登校できないの。ごめんね。」

手を合わせて、舌を出しながら嬉しそうに謝る彼女を見て、嬉しさとその先輩に嫉妬する

感情がまぜこぜになったのを覚えています。

結局先輩が卒業するまで付き合って、それからまた一緒に登校しました。

私が初めてラブレターを貰ったときにも、色々と考えてくれたのはヤヨイちゃんでした。

中学の時、私の下駄箱に封筒が入って居て、家に変える前にヤヨイちゃんの家に行ってそのまま、

ヤヨイちゃんの部屋で相談しました。

私の部屋よりも、広くて女の子らしい小物も多くて。

” いいじゃん、サトネは一人部屋でしょ？おねえちゃんと一緒つても結構きー使っただから”
というのが口癖だったけど。

「あのね、私こんなのもらっちゃったんだけど。」

「なにになに？ちょっとこれラブレターじゃん！すごいね！やったじゃない！相手は……。ゲー！黒田かあ。」

「黒田君って良くないの？」

「うーん。あいつはまあ、別名玉碎の黒田、告り魔とまで呼ばれてる男だからね。本気度低いかも。」

顔は割といいんだけどね。サトネが、おとなしいし、可愛いから押せば何とかなると思ってるのかもね？
で、で？どうするの？」

興味津々といった感じで、私の目を覗き込みました。ちょうど噂話をするおばさん達みなたいな、
ちよつと茶化すような聴き方で、でも、口調と裏腹に目は結構真剣で私の事を考えてくれているみたいです。

「私・・黒田君の事よく知らないし。喋った事ないし。ねえ、お断りって直接言わないとダメなのかな？」

「確かに、サトネと黒田って接点無いもんね。良いんじゃない手紙で、相手も手紙だったんだし。」

「そ、そうだよ。手紙、手紙……。」

「うん？どうしたの黙っちゃって？」

「ね、ねえヤヨイちゃん。手紙って何書けばいい？」

「さ、さとね〜それくらい自分で考えようよ。別にきつーく断つてもアイツは堪えないと思うし、そっけなくても

いいんじゃない？今はお付き合いする気は無いですか？別に好きな人がいますとか？」

「別に好きな人……。」

「おやあ？その反応はもしかして、サトネさんあなた好きな人があるな？」

「な、何言ってるのかなヤヨイさんは、そ、そんな事ないよー。」

「こら、白状しろ！もうネタは上がってるんだ！」

「ちょ、ちょっとやめてって。くすぐらないで、って！ああ。もう！」

ともかく、私が何かをする時にはいつも居てくれるのがヤヨイちゃんでした。

一人っ子の私にとっては、リードしてくれるお姉さんのような存在であり、

気兼ねなく話せる友人でした。

そんな私にも、如月ヤヨイがなぜ死んだのかについての情報は教えてもらえませんでした。

お葬式にもお通夜にも出ることができませんでした。

そう言った事は身内のみで行われたそうで、私たちのクラスからは唯一クラス委員の三条さんが参加されたそうです。

なぜ、私が呼ばれなかったのか、考えてみましたが分かりませんでした。

あるいは、いつもヤヨイちゃんの家にお邪魔していた私が行くと、ご両親が思い出してしまつて苦しいのかもしれないとも思いました。

あの突然の死の知らせ。

その前日も、その前前日もいつもと全く同じ様子であつたのに、若すぎる突然の死。

悲しみよりも、大きな喪失感だけが私を襲いました。

その日から、一週間は私は学校にいけないほどに、

何のやる気も出ない日を過ごしました。

ヤヨイちゃんの居ない人生に何の意味があるのでしょうか？

ここまで、私の中の多くを占める人は、お母さんやお父さんでもなく、ヤヨイちゃんでした。

全てに近いものを失つた私は、すぐに回復する事はできません。

それでも、ここで脱落してしまうのもイヤでした。

高校すら卒業できなかったヤヨイちゃんの分まで、せめて高校ぐらいは卒業しようと思いました。

悲しみの涙は、結局流していません。

私の涙の全てが止まつてしまつたようで、それから他の事でも泣けないのです。

あるいは、ヤヨイちゃんを失った喪失感がひどすぎて、まだ日常を現実として受け止められていないだけなのでしょうか？

そういえば、彼女の死因などについては実は公表されていないのです。前日まであんなに元気だったのですから、

病気なんてないでしょうし、事故や事件なら隠す必要も無い事です。なのに公表されない。そのうち、自殺だったから公表されなかったという噂が立って。

それがいつのまにか、真実として広まってしまったのです。

そういった、現実感のなさが私がヤヨイちゃんの死をまだ受け入れられない原因だったのかもしれませんが。

そして、今夜。

ヤヨイちゃんは再び私の前に現れました。生きていた。奇跡的に生きていたんです。

私の心が歓喜で震えました。生きています。

ヤヨイちゃんが。しゃべっている。

それだけで十分です。

なぜなら彼女が生きているんですから。

そして、彼女が告げた言葉は、私に深く突き刺さりました。彼女は告げました。

”みんなのせいで私は自殺した”

”この中の人にいじめられてたのが原因なんだ。”

彼女の死は自殺だったのです。
しかも原因はいじめだそうです。

相談してくれば良かった。

私は、特に何かできる力がないけれど。心配事は分け合うから、友達だと思うのに。

それに、相談してくれるだけでも心は軽くなると思うのに。

ヤヨイちゃんが私達、いじめた本人以外のクラスメイトについても憎く思うのも当然です。特に私は、このクラスの中で一番ヤヨイちゃんに近い所にいたのですから、私が一番気づかなければ行けなかったのに。

でも、ヤヨイちゃんは私にチャンスをくれました。

”誰が私をいじめていたのか気づいたら助けてあげる”

そうです。前は気づけなかったけれど、いまから、遅いけれど犯人を当てる事ができれば、ヤヨイちゃんの復讐に参加できる。

そう！私とヤヨイちゃんです。

一度自殺するところまで、ヤヨイちゃんを追い込んだ犯人を。

そう心に決めていた所で、

みんなの議論が始まりました。

話としては、誰を選ぶかというよりも、

ヤヨイちゃんをどうやって説得するかという方向に行こうとしています。

私は不満でした。みんな自分が助かりたいのは、わかるけど。ヤヨイちゃんを説得し、みんなが助かる道。結局それでは、弥生ちゃんの心は満たされないのだから。

”俺は如月への説得は、宮原一人にお願いしたいと思っている。”

大神君のこの言葉を聞いて、私は説得なんて成功させる必要はないし。

説得する振りさえすればいいと思いました。

幸い、私とヤヨイが親友なのはみんなが知っていますし、私が説得するという流れは自然なのでしょう。だから、私は告げました。

「私、やってみます。」

第六話 クラスメイトの順位

「私、やってみます。」

そう告げた宮原さんは、普段のか弱い彼女からは、信じられない位強い目をしていました。

南谷君の始めた説得の話は、宮原さんが受け入れた事でちょっと落ち着いたみたいです。

みんなが議論を進めてくれている中で申し訳ないけれど、シズクが気になっているのは一番はケイちゃんの事です。

いや、こんな状況でケイちゃんに甘えたいとか思ってるわけじゃないんだよ。

いつもみたいに、腕にひつつきたいとか、手を握って欲しいとか、あわよくば抱きしめてほしいとか……。

まあ、考えてないわけじゃないんだけど。

こんな時だから、心細くなっちゃうのはしょうが無いし、彼氏に甘えなくなるのも

守って欲しいと思うのもしょうがない事だとは思っています。

さつきシズクが泣いてしまった時から、何度もこっちを見て気にしてくれているのも

分かってて、だからシズクは何とか落ち着いていられるんだよ。

「具体的に細かい事まで決める事はできないと思う。さつきまでの態度から考えて、あの黒い女が

本物であれ、偽物であれ、如月として振舞うのは間違いないから、如月に話かけるつもりで接して貰えばいいと思う。

相手がちよつと矛盾した事を言っても、そこには突っ込まないであ

くまで、如月にこんな馬鹿な事をやめて
もらうようにしてスタンスで説得すればいい。」

「大神、さすがに丸投げはキツイだろ。俺としては、なるべく相手に話をさせるのがいいと思う。」

さっきの話だけだと、あいつが俺達にしたい事を一方的に宣言しただけで、本当は誰に復讐したいとか、

なんでこんなやり方をしてるのかに疑問が残るぜ。だから、如月が本当にしたいことは何なのかを聞き出して。

その答えに合わせて、危険の無い方に誘導してもらうのがいいと思う。宮原は大変だと思っけど」

「ありがとう。大神君。南谷君。でも、任せて、私が一番サツキの事わかってるから。」

「任せてしまって、ごめんなさい。お願いね。さっちゃん。」

「頼んだよ。宮原。」

「あんまし気負わなくていいぞ。リスクあるし、やばかったら宮内ヨロシクって言えば繋げてやるから!」

三条さん。ケイちゃん。宮内君が続けて声をかけます。

「結果についての文句はアタシは言わないさ。みんなで決めたんだから。」

「ごめん。よろしくね。」

「お願いするよ。がんばって。」

山里さん。佐々木さん。鈴木君も続けます。

しまった。気が付けばシズクが最後だ。ちょっと、まとめっぽい事を言わなくちゃいけないだろうか？

それとも、和ませるために明るいい感じがいいかな？

みんな私が何か言うのを待っている気がするし、しょうがない。恥ずかしいけど何か言おう。

「宮原さん、お願いするわ。私とケイちゃんのためにも。」

.....。

しまった！微妙な空気になってしまった。

これだから困る。シズクは笑いを取るのとか無理なのについ、狙いに行ってしまった。

しかも、天然で言っているとされているみたい。ケイちゃんの顔が引きつってる。

いやだ。もう、顔を隠したい。

こんな事で手を使えない事を意識しなきゃいけないなんて。

「ま、ま、まあ。雨宮夫妻と俺達のために、頼むよ。でも。無理はしないでいいからさ。」

それと、ここからは話変わるんだけど。もう一つ決めなきゃいけない事がある。」

先ほどの流れを引き継いで、大神君が話をリードしてくれる。

良かった。あの空気のまま固まって、気づいたら時間になったら最悪だもん。

9時50分あと10分しか無い。

みんなの顔にも真剣さが戻ったみたい。

まあ、しらけさせてしまったシズクが言う事でも無いんだけどさ。

それより、大神君が言っている決めなきやいけない事というのは、やっぱりアレの事だろう。

”誰を犯人として指定するか”だ。

宮原さんの説得が上手くいけばそれでいいんだけど。

そうとは、限らない場合にどうするか決めておかないといけない。

「やっぱり、誰かを選ばないといけないんだよね。」

「説得が成功しない事も考えられるもんね。そうだよねやっぱり。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・。」

どうしても会話が続きません。

やっぱり、みんなこの中で誰がいじめをしていた犯人なのか考えているのでしょうか？

それとも。誰が犯人なのかは、関係なくて誰なら”罰の実験台”にさせても良いかを考えているのでしょうか？

不意に寒くなつた気がして、肩を抱こうとして無理だと気付く。

体を固定されているためか、いつもより体が冷えている気がする。

季節的に寒く無いのはいいけど。

こうして、嫌な考えを思い浮かべてしまった時に体が動かない事はそれだけでストレスよね。

シズクはなんてことを考えてるんでしょう！

このクラスメイトの中で誰なら見捨ててもいいかを考えるなんて！！見捨てられていい人なんて居ないのに！

でも、まだ死にたくない。

そう。この夜で、とばかりで死にたくは無い！

まだ17歳なんだ。これから、もつといろいろな事を出来る年なんだ。

それは、クラスのみんなも一緒なんだけど。でも、やっぱり死ぬには早すぎる。

自分は死にたくない。

ケイちゃんにも死んで欲しくない。

いつも仲良くおしゃべりするツバサさんも、死んで欲しくない。

後の人は？

死んでいいとは思わないけど、正直そこまで仲の良くない人もいる。

宮内君とかは、話した事はあんまり無いけど。いつも楽しく盛り上げてくれる人だから、こっそり笑わせてもらっている。

山里さんは、近寄りがたい所があるけど、綺麗だし、弱いシズクと違って見習いたい所もいっぱいある。

佐々木さんは、本当にいい子だし。ケイちゃんの幼馴染だし、ケイちゃんのためにも選べないかな。

宮原さんは、関わり薄いんだけど。。如月さんを説得するためには居てもらった方がいいと思う。

大神君・南谷君・鈴木君は良くわからない。

普段クラスで関係することがほとんど無いし、この前喋ったは4月なんじゃないの？ってくらいに喋った覚えがない。

まあ、今日の話の感じだと鈴木君は殆ど発言しないし。

残るんだったら大神君や南谷君が残ってくれた方が……。

……。

……。

結論が出せてしまった。

クラスメイトに順位を付けるなんて！と思っていながら、シズクにとって、居なくてもいい人が決まってしまった。

鈴木ヨシヒコ君。

よく知らないという理由だけで選んでしまって申し訳無いけれど。いいの？こんな簡単に、クラスメイトを切り捨てて、それって最低の事じゃないの？

何も決まらないうちに時間が過ぎてしまう。

”そろそろ、誰か決めないと”と言おうとして、ふと考えてしまった。

シズクが鈴木君を選んでしまったように。

シズクやケイちゃんを選ぶ人もいるんじゃないの？

全員を見渡す。

みんな真剣に考えている顔をしているけど、頭の中でさっきみたいにみんなを値踏みしていると思うとぞっとする。

ふと鈴木君と目があつた気がしてとっさに目をそらす。

誰かに疑われる事を考えたら。

最初に、『私は鈴木君が良いと思う』なんて言うのは自殺行為だ。みんなに、近藤さんは人を犠牲に出来る人だと思われる。鈴木君からは、当然恨まれるから反対に『近藤さんが良いと思います』と言われてしまうかもしれない。

動けない。

何を言い出しても、議論が進まないか結局マイナスになってしまう。そうか、大神君とか南谷君とか、いままです議論を引っ張ってくれた人たちも

それに気づいているから。今は何も言えないんだ。

どうしよう？誰か選ばないと。

それもみんなに納得してもらえる形で。

どうすれば？

どうしよう？

「ダメだ。もう、時間だ。出たところ勝負しかない。」

大神君が、くやしそうに声を出す。

全員が時計を見る。

長針は既に12の位置に到達していた。

第六話 クラスメイトの順位（後書き）

中々話が進みません。
すみません。

時間が出来た時に、一度話を整理し直すかと思っています。

第七話 告げる名前（前書き）

話はゆっくり進むので、まあそのつもりでお付き合いいただけると嬉しいです。

第七話 告げる名前

「ダメだ。もう、時間だ。出たところ勝負しかない。」

大神が、くやしそうに声を出した所で全員の視線が時計に向いた。

長針が12の位置にある。

「くそっ！こんなの決められるわけねえだろ」

俺は思わず舌打ちする。

俺達が時計に気付くと同時に廊下から足音が聞こえたからだ。

本当に時間に忠実で、こっちの都合なんて考えてない無慈悲な足音だ。

「落ち着いて、大神君。南谷君。なんとかして、・・・みんなで乗り切りましょう。」

委員長の言葉で、少し心を落ち着かせる。余談だが本当は、三条はクラス委員ではあっても委員長じゃないんだが、俺は三条のキャラから勝手に委員長と呼んでいる。

しかし落ち着いた心も、直ぐに消えてしまう。

パタッ、パタッ、

という味気ない、特徴の無い足音が廊下から響く。一定で淀みないその足取りと、自分の呼吸がリンクしていく気がする。

それほどまでに、足音に意識が集中されている。今はきっと、教室3つ分ほど後ろだ。

みんな足音が一步步近づくとつれて

緊張して行くのが分かる。

俺だって緊張している。

宮原が失敗してしまえば、この中の誰かが罰される。

罰の内容は分からないけど、俺の考えだと最悪、死ぬ事もありえると思う。

普段は、頼りない、存在感の無い宮原だけど。今は、お前に全てかかっている。

頑張れ……。頑張ってくれ！

無責任にそんな事を願う。

そんな事を考えながら、さつき委員長があえて”みんなで”と言ったのは、宮原にプレッシャーを

かけないための気遣いだったのかな？なんて、場違いな事が頭の中を流れた。

パタッ、パタッ、トッ。……………ガラッ。

如月は、さつき去って行った時と全く同じ出で立ちで現れた。

罰するなんて告げたのだからつい、禍々しい死神の鎌のような物や、キラリと光るナイフなんかを持っているかと思っただが、

ぱつと見た限りじゃ。先ほどと同じ黒一色のローブ姿だ。まあ、あの下に隠されていたら分からないけどな。

「さて、一時間立ったよ！どうな？有意義な議論出来たかな？かな？」

誰も言葉を返さない。

如月がローブの下で、ほくそ笑んだ気がした。

「ダメだよ。ちゃんと話をして、それで思い出して貰わないとね。犯人が分からないなら罰する人が増えちゃうからね。」

・・・・・・。

相変わらず俺たちは無言だ。

宮原が動くまで、誰も動かないだろう。

ここは、アイツのタイミングに任せるしかない。他のヤツが邪魔するわけにはいかないんだから。

「あれ？今、私がここに来た目的分かってるよね。こっちから聞かないと答えられないのかな？」

それじゃあ、聞こうかな？犯人は誰だと思う？」

「ちよつと待つてよ。ヤヨイちゃん！！」

キタツ！

如月が早々と結論を求めて来たから、しょうがない！
もうここで勝負するしかない！

頼む、頼むぞ。

みんな二人の言動に最大の注意を向けている。
近藤と佐々木、あと鈴木は耐えるように下をむいているけど後のヤ

ツは全員

二人の方を向いている。

「うん？なにかな、さっちゃん。」

「ねえ、こんな事やめようよ。ヤヨイちゃんが戻って来てくれて私、本当に嬉しいんだよ。」

ヤヨイちゃんが死んじゃって、・・・死んじゃったと思ってから、しばらく学校にも行けなかったし。

何やっても楽しくなかったし、涙がね・・・グスツ・・・出なかったの。心が受け入れられ・・・なくて・・・。

でもずっと、ずっと、泣きたい気持ちが止まらなかった・・・泣けなくて。苦しくて。

私にとって、一番の親友で、何をするにもヤヨイちゃんから教わってた私の世界はね。

ヤヨイちゃんが居ないと成り立たないそんな物だったんだよ。

だから、今私にとって一番大事なのはヤヨイちゃんなの。」

「私にとっても、さっちゃんは親友だよ。」

如月の声は、とても平坦で響いているようには思えない。

それでも、きつと響いている。こいつが、如月なら響いていないはずがない。

「ありがとう。ヤヨイちゃん。いじめに気づいてあげられなかったこんな私を

まだ親友だと言ってってくれて。私にとって、ヤヨイちゃんは心の中心だから。

家族よりも大事だっと思える人だから、本当に嬉しい」

真っ暗で、陰湿な教室にふさわしく無い位に、迷いないはつきりした笑顔を

宮原は浮かべていた。

「だからね、こんな事やめようよ。こんなやり方良くないよ。」

「親友の貴方が私を止めようとするのね。」

平坦だがどこか怒りを感じさせる口調に変わった。

「違うよ！！ヤヨイちゃん！一緒にやろうって言ってるの。」

「一緒に何をやるって言うの？クラスの仲間と楽しく高校生活を？くだらないし、出来るわけないわ。今の私にはもうね。」

「自分をいじめてた人を許せないから？」

「そうよ」

「自分がいじめられていた事実気付きもしない人が許せないから？」

「そうね」

「そっか……………」

「もう、分かったでしょ。説得してもどうしようもないって、今日

の為に下準備もしているの。
転がり始めた石はもう止まらないわ。何かを壊すまでね。」

・・・
「良かった。じゃあ、この復讐は諦めないんだね。」

今は、宮原は何と言った？
復讐を諦め無い事が、良かった？だと。

正直方向性は悪く、如月を説得できる可能性は低いと思っていた。
話の方向を、犯人以外の開放にもって行こうかと考え初めて居たくらいだ。
だけど、良かったとは？どついう事だ。
宮原が話を進める。

先ほどと同じ笑顔なのに、それが能面のように怖く見えた。

「じゃあね、私が手伝ってあげるよ。
この中の人に復讐したいんでしょ？いいよ。私手伝う。なんでもやるから言つて。
ヤヨイちゃんは死ぬような目にあつたんだもん。
何やったっていいよね。それこそ、殺しちゃったってさ。」

「ちょ、ちょっと、さっちゃん！？な、何言ひ出してるの？」

「そうだぞ、宮原！落ち着け、俺らは無事に帰らないといけないんだから。」

如月！聴いてるだろ。お前の事をこんなに思ってくれている宮原が

ここに居るんだぞ。

俺達の選んだ人間を無差別に罰するなんてやめて、せめていじめの犯人だけを残して、残りは開放してくれないか？」

俺と、委員長が慌てて話を遮る。一体何を言い出したんだよ！こいつは――！

「うるさい！！二人とも黙って！私は、ヤヨイちゃんとお話してるの！

ねえ、ヤヨイちゃん。私が手伝ってあげるね。

ヤヨイちゃんの目的が果たせるように。

このクラスの人たちは、ヤヨイちゃんを殺したも同然なんだから、なんでもしていいよ。

うふふ」

「ふふふつ。なーんだ。そう、協力してくれるのね。ありがとう。さすが、親友ね。」

「うん。そうだよ何でも言っで。」

暴走する宮原に大して、みんなが一斉に声をかける。

「そんな、事約束したらダメ！」「何言ってるか分かってんのアンタ！」「オイ、落ち着けもう一回考えろよ！」

「宮原さんやめて！」「冷静に考えろ！それじゃ何も解決できない」

俺達の声は止まらない。マズイ。この流れは、マズイ。何とか落ち着いて、

宮原を落ち着かせる時間をつくらないと。

「ああもう、うるさいな。ねえ、サトネ。貴方の考える一人目の犯人って誰？」

俺達があッと思った時には既に

宮原の口が開き、その言葉をスラスラと告げた。

「私は、一人目は山里ユウコだと思うわ。」

それは、この10人の中に明確に敵・味方が生まれた瞬間だった。

第八話 逃れられぬ対決

「私は、一人目は山里ユウコだと思うわ。」

それは、この10人の中に明確に敵・味方が生まれた瞬間だった。

「ちょ、ちょっとなんでアタシが犯人になるのよ!」

状況についていけないわたし達の中で、ユウコがすぐに反論した。それは、反論というよりも反射だったのかもしれない。自分が犯人にされてしまう恐怖から、とっさに口を出た言葉。

二人の言葉が中々頭に入らない。

サトネは、ユウコが犯人だと言って……それで、

ユウコは、自分が犯人では無い。何で疑うんだと言っている……。

うん。その認識であっているんだけど。

頭が回らない、まるでテレビの中の映像でも見ているみたいに自分で考えることができない。

考えても、動けない。二人の世界に外側から干渉できない。

何で、ユウコを疑うのか？

その疑問はわたし佐々木ヨシノにとっても疑問だった。

疑問だと言えばサトネが何で暴走したのかも疑問だったけど、如月さんとの間に、わたしが考えるより深い感情があったとすれば、完全におかしいわけじゃない。

今は何よりなぜ？サトネがユウコを犯人だと思っているかの方が重要よね。

．．．．．

記憶を探る。ユウコとヤヨイは元々そんなに接点が多く無い。

いじめにつながるようなエピソードであれば、わたしも知っている可能性はある。

．．．．．

．．．．．！

もしかして、サトネが疑っているのはアノ事なんじゃ？

「なんで？そんなのも分からないの？ねえみんな分かるよね？」

見回すサトネの顔に目を合わせるのが怖くてつい俯いてしまう。

もしかして、という思いがあるものの、今のサトネにはとてもじゃないけど言えない。

本能的に分かる。あれは、逆らったり怒らせてはいけない人の眼だ。何かを話かけたら取って食われる。

「みんなも覚えてるはずよね。その山里ユウコが何をしたのかをねっ！

貴方があの本の事で、ヤヨイちゃんを笑ったりしなかったら。ヤヨイちゃんは

いじめられる事なんて無かったのよ。」

やっぱり！

サトネが言っているのは、ちょうど梅雨の時期にこのクラスで起きた事だ。

私はその時は、たしか別のクラスの友達としゃべりに行ってて。教室に居なかったから後から聞いた話なのだけねど。

梅雨の時期、昼休みの教室はいつもより人が多くなる。

特に外で運動する部活は、雨のせいで昼練ができないからで、その日も多くの人が教室に居たそうだ。

ユウコは普段は教室に居るタイプじゃないんだけど。その日は、たまたま教室に居て、

友達とおしゃべりしているうちに、たまたま、近くに座っていた如月さんが気になったらしい。

私の知っている限り、二人は親しい方じゃなかったから、本当にたまたま話かけたのだろう。

「如月さんって、どんな本読んでるの？面白い？」

という感じだったのだろうか。

問題だったのは、如月さんがそのとき読んでいたのがたまたま、官能系の小説だった事だ。

まあ、大人しい感じのする。如月さんが、そういう本を読む事も、なおかつそんな人の多い教室で読んでる事も

大分驚きなんだけど。本人の趣味と言えば趣味だ。

健全では無いけども、いやいや、ある意味じゃそういう性に関する興味で溢れているのが

高校生としては健全なんだろうか？

私だって家で読んだ事はあるもんね。

可憐という感じの容姿で、詩集とか読んでいるのが似合うイメージの如月やヨイだけにそれは本当に驚きだ。

とにかく、そこだけで話が終われば、如月さんも少し恥ずかしい思いをして、

その後は、そういう本は家で読む事になるだけだったんだらうけど、良くも悪くも・・・この場合は悪くなんだけど。山里ユウコはリアクションの大きい娘だったんだ。

「ちょっと貸して！」

「えっ！？あつ！山里さん、まって！」

「小説？字多いね！。アタシことういうの苦手！なにになに、えっ！やだ、うつそ〜！なにこれ〜。官能小説ってやつ？」

こんなの良く学校で読めるよね。如月さんって意外な事にムツリスケベだったんだ〜」

と、クラス中に聞こえる声で言ってしまったそうだった。

クラス全体が騒然として、その日の昼休みはなんだか微妙に気を使った雰囲気が終わったそうだった。

ひそひそ、ひそひそとクラス中が噂しているってイメージね。

まあ、私はその日は全然そんな雰囲気には気がなくて、その話も大分後になってから聞いたんだけど。

クラスの女子の間では、しばらくは如月やヨイじゃなくて、如月エロイだね。とか、

官能小説家とか、呼ばれていじられていた。本人は、あんまりそういうマイナスをネタに出来るタイプじゃないし、

からかっても反応が薄いという事で、すぐに話題にならなくなった。男子の方が食いついて、

「実は、如月さんって痴女？」

とか失礼な事を言うヤツがいたけど、そういうヤツは逆に女子から総スカンを食らってたから殆ど一週間しないうちに、誰も触れないネタになったと思う。

正直人によるんだろうけど、私とかユウコ辺りなら、この程度のネタはそれほど痛く無いし。

もちろん恥ずかしくはあるんだけど、このぐらいで、いじめっているのはちょっとなという思いがある。

シズクや、サトネ、ヤヨイだとかやっぱりちょっとキツイのかもしれ

ない。

いじったり、いじられたりに疎くて、重く受け止めすぎる気がする。ツバサあたりなら、何となく自分の中で折り合い付けられそうな気がする。

「あの時の事、ヤヨイちゃんはずっと、ショックだったんだよ。みんなが私を見る目が変わったって言って。」

だから、そのきっかけを作った貴方が犯人。ここのみんなも証明してくれるわ。」

「な、なに勝手なこと言ってるのよ！それ、あんたが考えただけでしょ！それに、そんな5月の頃の事が原因で今更自殺しただなんて信じられないわよ。」

「最近でも、ヤヨイちゃんの事をエロ女と呼ぶ事があったでしょ？」

「そ、そりゃゝたまには、いじめとかじゃなくて。ネタでそういう言い方する事はあったけど、そういうのって」

笑って済ませるレベルの内容でしょ。いじめとか陰湿なものじゃ無かったのは、アンタだってわかってるじゃない！！」

ユウコの言葉は既に絶叫に近い。自分を追い詰めようとする、サトネを殺さんばかりに睨んでいる。

「そんなの分からないわよ。貴方が遊びや、おふざけとっていてもそれで傷つく人はいるのよね。」

とくに、純粹だったヤヨイちゃんは、みんなから淫らな人間だと思われる事がショックになっていたのよ。」

「・・・っつ！そんな事言ったら本当にショックだったかどうかなんて本人にしか分からないでしょ！なんでアンタが宣言できるのよ！」

「できるわよ。だって私はヤヨイちゃんの親友だもの」

怒鳴りすぎて、肩で息をしているユウコに対して、平然とした顔でむしろ追い詰める事喜びを感じているかのようなサトネ。二人の間には、殺気のようなものが迸っている。

「ねえ。もう時間過ぎてるんだよね。もう決定でいいのかな？」
いい加減手持ち無沙汰になったのか黒い影が告げる。

「待て、如月考え直」

「いいわ、犯人は山里ユウコよ。」

南谷君の言葉を宮原サトネが遮った。

「ちょっと、待ちなさいよ！それならアタシはこう主張する！犯人は宮原サトネ。自殺の動機は一方的な如月に対する思いが強すぎて、精神的に追い詰められたため。これでどうよ！」

サトネの宣言に間髪入れずにユウコが噛み付いた。

「ちょっと待て、山里その展開はマズイ。落ち着け！」

「大神は黙って！こっちは、良くわからない喧嘩吹っかけられてるんだ。正直もう、この先の展開とか宮原の事とか考えてる余裕なんてないわよ！」

「私と、ヤヨイの仲を疑うなんて最早愚かね。反論するまでも無いわ。」

「ふん！どうだね。とにかくこれで1：1よ。私は犯人じゃない！」

「私も犯人では有りません。それじゃ、後はみんなに決めて貰いましょう。私とヤヨイの友情が正しいのか、それとも、それすら疑われてしまうのか。」

ここまで責められるまで、ユウコはまだ今後の展開とか、説得を続けようとか、サトネへの気遣いとかを持っていた。

でももう無理だ。全面対決は避けられない。
如月さんを説得なんて状態じゃない。とにかくココで、どちらかに犯人が決まってしまうんだ。

私は、うまく動かない手を背中に押し付けた。

本当は自分を抱きしめたい位だったけど、せめてとギリギリ自分の触れる範囲で小さく体を包んだ。
けれど、結局包めずに余計に不安が心にのしかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0682w/>

疑う円環

2011年10月19日02時07分発行